

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00710

研究課題名（和文）日本語教育における「ほめ」の使用実態と機能

研究課題名（英文）The Usage and Function of "praise" in Japanese Language Education

研究代表者

永田 良太（NAGATA, RYOTA）

広島大学・人間社会科学研究科（教）・教授

研究者番号：10363003

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、さまざまな観点から行われてきた「ほめ」に関する先行研究をレビューすることにより、「ほめ」の研究の現状を整理するとともに、残された研究課題を明らかにした。また、教育やコミュニケーションの場面で問題になる「ほめ」の言語間の差異について、日本語とインドネシア語を対象にして明らかにした。さらに、教育課場面における「ほめ」の意識を明らかにするとともに、今後の基礎資料となるインドネシアの日本語教育における授業談話のデータも収集し、整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育場面においては教師と学習者の人間関係を構築することが重要である。そのような人間関係の構築・強化において、「ほめ」は重要な役割を果たす。本研究では、「ほめ」の研究を概観することによって現状と課題を明らかにするとともに、教育上やコミュニケーション場面で重要になる言語間の差異を明らかにした。本研究で収集し、整理したインドネシアの授業談話は今後の研究資料として活用することが期待される。

研究成果の概要（英文）：In this research, by reviewing the previous research on "praise" that has been conducted from various viewpoints, the remaining issues were clarified. This research also clarified the differences between the languages of "praise", which are problematic in educational and communication situations. In addition, the data of class discourse in Japanese language education in Indonesia, which will be the basic material were collected and organized.

研究分野：社会言語学

キーワード：「ほめ」 授業談話 日本語教師 日本語学習者

1. 研究開始当初の背景

「ほめ」に関しては、その種類や機能について、さまざまな観点から言語学的な分析が行われてきた。教育現場における「ほめ」について考えるためには、それらの研究を包括的にまとめることで研究の現状と課題を明らかにする必要がある。また、日本語教育現場における「ほめ」について考えるためには、教師や学習者の意識を探るとともに、授業談話における「ほめ」の使用の実態を明らかにする必要がある。さらに、使用の要因や指導について考えるために、学習者の母語と日本語との間の「ほめ」の差異についても明らかにすることが求められる。

2. 研究の目的

日本語教育現場における「ほめ」について考えるために、「ほめ」の研究の現状と課題をふまえ、日本語教師と学習者の「ほめ」の意識および授業談話における使用実態を明らかにする。同時に、使用実態や指導について考えるために、学習者の母語における「ほめ」と日本語の「ほめ」の差異についても明らかにする。

3. 研究の方法

「ほめ」に関する先行研究をまとめることで、「ほめ」に関する研究の現状と課題を明らかにする。日本語教師と学習者の「ほめ」に関する意識を探るために、アンケート調査とインタビューを実施する。授業談話における「ほめ」の実態を探るために、授業談話を録画するとともに、言語間の「ほめ」の差異について、要因を統制した談話を分析することで明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、日本語教育における「ほめ」の実態と機能を明らかにすることを目的として、研究期間中、以下のことに取り組んだ。

(1) 「ほめ」に関する先行研究の概観と残された研究課題の指摘

従来、「ほめ」に関してはさまざまな観点から研究が行われてきた。日本語の「ほめ」に関しては、種類、表現、対象、対人関係、返答、連鎖という観点から分析が行われ、他言語とも対照することで、その特徴が明らかにされてきた。日本語教育の視点に立った時、「ほめ」の表現にとどまらず、「ほめ - 返答」といった隣接ペアや先行連鎖・後続連鎖まで、その対象が拡大されていることも、実際の会話の中で「ほめ」を用いるためには重要である。

コミュニケーションレベルでは、相手と「同じであること」を示すことで仲間意識が保たれ、円滑なコミュニケーションが維持されることがある。ここから、実際に会話の中で「ほめ」を用いて人間関係を維持・構築するためには、分析対象をさらに拡大する必要性が示唆される。談話全体を通して「ほめ」を分析することで、人間関係の維持・構築に関する働きがより明確になるとともに、日本語学習者にとっての課題も明らかになると考えられる。

「ほめ」への返答に関して、日本語学習者は否定的応答や特定の表現(「まだまだです」)に偏る傾向があるが、そのような表現上の問題に加えて、会話全体を見通す視点が今後は求められる。談話レベルでの「ほめ」の研究は、これまで特定の学習者や特定の種類の談話の分析にとどまっている。今後は習熟度や母語の違い、さらには「非目的指向型 - 目的指向型」といった談話の種類を考慮した分析を行うことで、会話中での「ほめ」の役割がより明確になるとと思われる。加えて、「ほめ」に対する応答を考える際には、視線を外してお辞儀をしたり、首を振ったりするなどの非言語行動やパラ言語的情報も考慮する必要がある。

これらの観点からの分析を通して、日本語母語話者や日本語学習者の「ほめ」の実態が明らかになり、日本語教育における会話指導がさらに充実することが期待される。

このように、先行研究を包括的にまとめることで、「ほめ」に関するこのような研究の現状と課題を指摘した。このような研究成果は論文として公開された。

(2) 日本語教師と日本語学習者の「ほめ」に対する意識調査

日本語教師と日本語学習者の「ほめ」に対する意識を探るために、日本、中国、インドネシアで、選択肢と自由記述から成るアンケート調査と半構造化インタビュー調査を実施した。新型コロナウイルス(COVID-19)の影響により、調査の実施が予定より遅れ、2021年度に実施した。アンケート調査の協力者の中から協力者を募り、アンケート調査の結果についてさらに深めるために半構造化インタビューを行った。収集したデータについては、整理して分析・考察を加えた結果を公表する予定である。

(3) 日本語の授業談話の収集

日本語の授業談話における「ほめ」の実態を明らかにするために、日本語の授業談話をインドネシアで収集した。新型コロナウイルスの影響により、当初の予定よりも収集の時期や方法を変更せざるを得なくなった。また、収集可能な教育機関もインドネシアに限定されたが、収集されたデータはインドネシアの授業談話における「ほめ」の実態を明らかにするための資料になるものである。収集した談話データは今後整理して、談話展開の観点から分析・考察を行った結果を公表する予定である。

(4) 日本語とインドネシア語の「ほめ」の比較

言語間の「ほめ」の差異を明らかにするために、日本語とインドネシア語の「ほめ」の比較を行った。条件を統制して比較するために、両言語における自由会話を採集し、そこに多く見られる「対者ほめ」に着目して、ターン・テークの観点から分析を行った。

ストラテジーの観点から見ると、第三者「ほめ」では「ほめ」の対象がその場におらず、相手に配慮の必要がないため、ほめ手が「ほめ」対象をあからさまにほめることが明らかになった。しかし、「ほめ」の出現頻度を見ると、日本語では第三者「ほめ」と対者「ほめ」にはそれほど差が見られないのに対して、インドネシア語では第三者「ほめ」の出現頻度は対者「ほめ」の約半分であることが分かった。

全体的な話題を見ると、インドネシア語では第三者に関する話題よりも会話参加者に関する話題の方が多いため、対者「ほめ」に比べると第三者「ほめ」が少ないことが分かった。一方、日本語では、第三者に関する話題は会話参加者に関する話題が少ないものの、対者「ほめ」と第三者「ほめ」の出現頻度がさほど変わらないことが明らかになった。ここから、インドネシア語母語話者にとって、日本語における「ほめ」は「多い」と思われる可能性があると考えられる。

連鎖の観点からは、両言語において、先行連鎖ありと後続連鎖ありが最も多く現れることが明らかになった。ただし、日本語では先行連鎖と後続連鎖はほめ手と相手によって均衡に行われるのに対して、インドネシア語では先行連鎖と後続連鎖はほめ手によって行われることが多い。また、一つの話題における先行連鎖と後続連鎖の導入者を見ると、日本語では「ほめ手」と「相手」がほぼ同じ割合で現れるのに対して、インドネシア語ではどちらも「ほめ手」によって導入されることが多いという違いがある。このことから、インドネシア語における「ほめ」では、「ほめ」を行う際に慎重に行わないと話題が転換されにくい恐れがあるため、ほめ手は「ほめ」を控えめに行う可能性がある。

このような両言語の違いから、インドネシア語母語話者は日本語母語話者の「ほめ」が大げさだという印象を受ける可能性がある。逆に、日本語母語話者にとっては、インドネシア語母語話者の「ほめ」が消極的で当該の話題に興味がないという印象を与える可能性がある。円滑なコミュニケーションを行うために、インドネシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面では、インドネシア語と日本語の違いを理解することが求められる。教育場面でも、両言語間に存在するこのような違いに留意する必要がある。このような研究成果は論文として公開された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 永田良太	4. 巻 31
2. 論文標題 日本語の「ほめ」に関する研究の概観と展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mutia KUSUMAWATI・永田良太	4. 巻 50
2. 論文標題 談話における日本語とインドネシア語の「対者ほめ」：「ほめ」の連鎖に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nidaba	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------